

目的を表す「ないために」の実態

茂木俊伸

(キーワード: 「ために」, 「ない」, 目的節, 「ように」, 自己制御性, コーパス)

1. はじめに

目的を表すタメニ節は、「太らないために運動をする」のように否定の「ない」を含む場合がある。本稿は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」モニター公開データ2008年度版（以下、BCCWJ 2008と呼ぶ）¹⁾を用いて、現代におけるこのような「ないために」という表現の使用実態を報告するものである。

「ないために」に関しては、先行研究においていくつかの指摘がなされているものの、タメニ節の典型的な用法とは言いにくく、また、母語話者の内省でも許容度に差が見られる。このような「ゆれ」を伴う文法現象の分析には、大規模なコーパスを用いてその実態を捉えようとするアプローチが有効であると考えられる。

本稿では、以下、BCCWJ 2008から得られたデータに基づき、「ないために」に関する先行研究の記述の内実や妥当性を検証していく。まず、先行研究を概観して「ないために」の位置付けを行う（第2節）とともに、BCCWJ 2008における用例を確認する（第3節）。

そのうえで、先行研究の記述に見られる、「ないために」への助詞の後接の問題（第4節）、先行述語の問題（第5節）、動作主の問題（第6節）を検証する。さらに、この現象の定量的な側面から、BCCWJ 2008内の各媒体における特徴を分析する（第7節）。

2. 先行研究における「ないために」

まず、タメニ節における目的を表す「ないために」の位置について検討する。

従来のタメニ節の研究において主に取り上げられてきたのは、タメニ節が「目的」と「理由」の二つの用法を持つということ（(1a), (1b)）と、目的を表すタメニ節とヨウニ節の相違に関する問題（(1a), (1c)）である。

- | | | |
|--------|-----------------------------------|-----------|
| (1) a. | 東京の大学に合格する <u>ために</u> 、一生懸命勉強した。 | (目的のタメニ節) |
| b. | 東京の大学に合格した <u>ために</u> 、その恋は終わった。 | (理由のタメニ節) |
| c. | 東京の大学に合格できる <u>ように</u> 、一生懸命勉強した。 | (目的のヨウニ節) |

このうち、ここで問題とする目的のタメニ節に関しては、次の[表1]のように、従属節内の述語の種類（意志性の有無）と、従属節における動作の主体のあり方（従属節と主節の動作主の一致の有無）に関する制限があるとされるのが一般的である。

[表1] 目的の「ために」と「ように」

		従属節の主体	
		同	異
従属節の述語	動作的（意志的）	ために	ように
	状态的（非意志的）		

(前田2006: 39)

[表1]に基づけば、状態性を伴う否定の「ない」に続くことが期待されるのは「ように」であり、その意味で「ないために」という形は非典型的な表現であるということになる。

実際、規範性を重視すると考えられる日本語教育用の文法参考書類（例えば、グループ・ジャマシイ1998、庵ほか2000など）でも、「ために」の前には意志的な動作や事態が来るとしており、「ないために」という形に関してはあまり記述が見られない²⁾。

一方、文法研究においては、古くは大塚（1964）が、「ないようにするために」を規範的な（「正確」な）表現だとしつつも、「ないために」も「度々聞く言葉」だとしている。また、佐治（1984）や田中（2002）、稲垣（2009）が示している母語話者へのアンケート結果からは、「ない」に続く場合はやはり「ように」が優勢ではあるが、「ないために」を認める話者も一定数存在することが分かる。

これらのことから、目的を表す「ないために」は、その存在は以前から指摘されているものの、未だ規範的な表現と認められるには至っていない、「ゆれ」のある現象であると言える。

この目的用法の「ないために」に関しては、先行研究においていくつかの指摘がなされている。それらの内容を項目としてまとめると、概ね次のようになる。

- (2) a. 「ないために」への助詞の後接（塩入1995、田中2002など）
- b. 「ないために」の前接動詞の特徴（ヤコブセン2004など）
- c. 「ないために」の使用条件（國廣1982、前田1995、升岡・鹿野2000、日本語記述文法研究会2008など）

このうち、コーパスを用いて実態把握が容易なのは、(2a)と(2b)である。これらの点はそれぞれ第4節、第5節で扱う。(2c)については、(2b)の問題と合わせて第5節で検討し、実態に即した形で記述の修正を図ることにする。

3. BCCWJ 2008における「ないために」

まず、BCCWJ 2008における「ないために」の用例数は、次の[表2]に示すとおりである³⁾。なお、用例数には、「ない／無い」「ために／為に」という表記の組み合わせをすべて含む。また、助動詞の欄には「ぬために」の例（目的用法のみ10例）を含んでいる。「不明」はどちらかに解釈が決定できない例を指す。

[表2] BCCWJ2008における「ないために」

	目的	理由	不明	計
助動詞「ない」	253	111	3	367
形容詞「ない」	5	43	0	48
計：	258	154	3	415

[表2]のように、助動詞「ない」を含む「ないために」では、目的用法の例が253例（68.9%）見られ、この表現の少なくとも3分の2は目的用法の解釈がされていることになる⁴⁾。

また、形容詞「ない」を含む「ないために」でも、5例（10.4%）と少数ではあるが、目的用法の例が観察される。次の(3a) (3b)が助動詞の例、(3c)が形容詞の例である（下線は筆者による。例文右に出典データのサンプルIDを示す。以下同様）。

- (3) a. 「今のは何だろ?」「風の大魔法だよ。ミツルが、僕たちを寄せつけないために、クリスタル・パレスを竜巻で包んじゃったんだ」 (OB 6 X_00103)
- b. 私は色々な問題が起きない為にもオークションIDは、一人一つにすればいいと思っています。 (OC14_01406)
- c. その中で目的を見失い、道を踏み外すことがないために重要なことが経営者そして管理職の「倫理性」であり、忍耐であり、自制心であり、バランス感覚（豊かな常識）であり、正しい使命感・価

値観・目的観であり、勇気です。

(PB41_00069)

なお、「ないために」の用例数と大塚（1964）が規範形とする「ないようにするために」の用例数との比較を、同じく周辺例であると考えられる「できるために」⁵⁾と「できるようにするために」の比較とあわせて[表3]に示す。

[表3] 「~ようにするために」と「~ために」

	ようにするために	ために
ない	39	258
できる	23	15

[表3]を見るかぎりでは、目的用法の「ないために」は、非典型的な表現ではあるものの、明らかな誤りとして無視できるほど限定された現象でもないことが分かる。

4. 「ないために」への助詞の後接

田中（2002：42）は、目的用法の「ないために」が持つ不自然さが、「は」や「も」の後接によって「座りがよくなる」ということを指摘している。

BCCWJ 2008における目的用法の「ないために」について、助詞類、特に「は」「も」を含む副助詞類の後接の状況をまとめたものが、次の[表4]である（「φ」は何も後接しないことを表す）。

[表4] 「ないために」への助詞の後接

後接語	用例数	
φ	124	48.1%
は	63	51.9%
も	69	
こそ	1	
か	1	
計：	258	100%

[表4]のように、「ないために」には「は」「も」「こそ」「か」の後接が確認でき、特に「は」「も」の例が多い。しかし、助詞の後接のない例も124例（48.1%）と半数弱あり、目的用法の解釈には助詞の後接が必須ではないことが分かる。ただし、助詞が後接している例はすべて目的用法の例であり、助詞の後接のない例とは明らかに異なる振る舞いが確認できた。

5. 「ないために」と先行述語

ヤコブセン（2004：109）は、「ないように」と同様に目的用法の「ないために」が許容可能になる例は、「ない」に先行する動詞の「意図的、非状態的な性格」によるものであると指摘している。ここから予想されるのは、目的用法の「ないために」では「ない」の先行述語に意図性あるいは意志性による偏りが見られるということである。

助動詞「ない」を含む「ないために」の先行述語をまとめたものが次のページの[表5]である。

実際、[表5]からは、述語の意志性と状態性について一定の傾向を読み取ることができる。すなわち、目的用法で多い先行述語は、他動詞、自動詞、助動詞（使役）の順であり、このうち他動詞と助動詞（使役）は意志性が高いと言える。一方、理由用法の先行述語は、テイル形、自動詞、可能動詞の順であり、このうちテイル形

[表5] 「ない」(助動詞)の先行述語

		目的用法		理由用法	
動詞	他動詞	127	50.2%	11	9.9%
	自動詞	66	26.1%	25	22.5%
	可能動詞	1	0.4%	24	21.6%
形容動詞		0	0%	2	1.8%
助動詞	使役(サ)セル	39	15.4%	1	0.9%
	受身(ラ)レル	19	7.5%	8	7.2%
	断定ダ	0	0%	2	1.8%
	可能(ラ)レル	0	0%	8	7.2%
テ形	テシマウ	1	0.4%	0	0%
	テイル	0	0%	29	26.1%
	テアゲル	0	0%	1	0.9%
計：		253		111	

と可能動詞は状態性が高いと考えることができる。ここまでの範囲では、先の予想は概ね妥当である。

しかし、目的用法の自動詞に関しては、次の(4)に挙げるように、意志性の高い語が多いという期待には当てはまらない結果になる。すなわち、(4)の動詞は、そのほとんどを主語の意志の外で起こる事態を表す自動詞が占めている(複数例ある場合はカッコ内に用例数を示す)。

- (4) なる(42), 死ぬ(4), (事故などが)起きる/起こる(3), 後悔する(2), 負ける(2), (詐欺に)遭う, 意気消沈する, 落ちる, (湯気が)来る, 激太りする, すべり落ちる, (戦争に)突入する, (魅力に)囚われる, (大衆が)奴隷化する, 眠る, (犯罪が)ばれる, ほける, (国が)滅亡する

このような「ために」の先行述語の意図性あるいは意志性に関して、他の先行研究では、先行する内容が「動作主の意志で制御できる範囲内にあるととらえるか否か」(國廣1982)や「自己制御性がある動作」かどうか(前田1995)が問題であり、その制御の「目的意識」(升岡・鹿野2000)や「積極的」な実現(泉原2007, 日本語記述文法研究会2008)を強調する場合は「ないように」ではなく「ないために」が使用されるとされている。

これらの記述は重要なポイントを捉えており、付け加えることは多くないが、BCCWJ 2008における「ないために」の用例を見るかぎりでは、仁田(1988, 1991, 2004)の「自己制御性」の概念を援用し、先行述語のみを取り出さずに「～ない」という事態が制御可能かどうか、という観点から分析した方が、記述的な妥当性がより高くなるように思われる。

まず、動きの成立や達成が自己制御可能という典型的ないわゆる「意志性」を持つ動詞であれば、その非成立も自己制御できると言える(cf. 仁田1988)。このため、動詞のタイプから「～ない」全体の自己制御性についてある程度の予想ができるという点は、先のヤコブセン(2004)の指摘と一致する。

さらに、動作の成立や達成ではなくその「過程、動き達成への企て」に関する意志を表す「過程の自己制御性」(仁田1991:243)の概念は、先の(4)の例の多くを捉えることができる。田中(2002:35)は、先行述語が意志性を欠いても「主体の決意」を表す場合はヨウニ節ではなくタメニ節が選択されることを指摘しているが、実際、(4)の「なる」「負ける」などは、動詞が表す事態を最後まで制御するという意味での意志性は低いものの、「～にはならないぞ」「負けないつもりだ」といった制御への「決意」は可能である。

また、「(事故が)起きる」「(犯罪が)ばれる」などの事態は話者にとって自己制御不可能なものであるが、「(事故が)起きない」「(犯罪が)ばれない」といった状況を実現可能と見なし、そのために行動することに意味がある、と考えられる場合に「ないために」という表現が用いられているのだと考えられる。

これらのことから、「ないために」構文の意味をまとめると、次のようになる。

- (5) 「P ないために Q」は、目的を表す「ために」に先行する「P ない」という事態を制御可能と見なし、「P」という問題の発生を「Q」で示される方法によって予防的に回避することを表す表現である。

6. 動作主の問題

先の第2節の[表1]のように、目的のタメニ節では、従属節と主節の動作主（動作の主体）が一致しているとされるのが一般的である。ただし、第4節で見た「は」や「も」のような助詞がタメニ節に後接した場合はこのような制限がなくなるとされる（cf. 塩入1995）。

これらのことをふまえて、「ないために」における動作主の一致／不一致と助詞の後接の有無をあわせて示したのが、次の[表6]である（「省略・不明」とは、「独りよがりにならないために」（PB53_00414）という見出しのように主節に相当する部分がない例や、例文中の動作主の同定が困難な例を指す）。

[表6] 「ないために」構文の動作主と助詞の後接の有無

	助詞あり	φ	計
同主体	105	93	198
異主体	21	20	41
省略・不明	6	13	19
計：	132	126	258

[表6]では、助詞の後接の有無に関係なく、従属節と主節の動作主が一致しない例がそれぞれ21例、20例と一定の割合（15.9%）を占めている。このような例では、形式上、主節の動作主が従属節の事態をコントロールできないという点で、「～ない」という事態の自己制御性が相対的に低いと言える。

主節と従属節で動作主が一致しないケースの具体例は、次のようなものである。（6a）は人、（6b）は無生物が従属節の主体となっている例である。

- (6) a. 児童生徒が学校での事故や通学時の交通事故等を起こさないために、事故防止を含む学校における安全教育の果たす役割りの重要性が私は叫ばれると思います。（OM25_00004）
 b. お風呂から出たら窓を開けます。そしてお風呂のドアは閉めます（湿気と湯気が脱衣所にこないために）。（OC08_01618）

これらの例は、形式的には動作主の不一致が見られるが、意味的には、従属節内の主体「児童生徒」（（6a））を指導したり「湿気と湯気」（（6b））の進路を誘導したりすることにより、それぞれの従属節の事態がコントロール可能であると見なしているものと考えられる⁶⁾。

[表6]の助詞の後接がない例について、議論を単純化するために、助動詞「ない」の例でかつ先行述語が他動詞もしくは自動詞である例のみを示したのが[表7]である。

[表7] 「ないために」構文の動作主と先行動詞

	他動詞	自動詞	計
同主体	50	16	66
異主体	9	4	13
計：	59	20	79

従属節の事態の自己制御性という観点から見れば、同主体でかつ先行述語が他動詞という表の左上側が（「ない」を含むこと以外は）最もタメニ節の典型に近い例、異主体でかつ先行述語が自動詞である表の右下側が最も非典型的な例であると言え、実際に用例数の多寡もそれに一致している。例えば先の（6b）は、Yahoo! 知恵

袋に3例見られた異主体かつ自動詞の例である。このような例は、動作主と先行述語の両方の条件で自己制御性が低くなっているため、内省でも許容しにくいように思われる。

7. 「ないために」の出現頻度

最後に、「ないために」の定量的な側面を取り上げる。

日本語記述文法研究会(2008:234)は、目的用法の「ために」は動詞肯定形への接続が基本としつつも、「ないために」のように「まれに否定の非過去形にも接続する」とする。では、目的用法の「ないために」は実際にどの程度コーパスに現れるのだろうか。

先に第3節の[表2]で見たように、「ないために」という形式において、特に助動詞「ない」の場合、目的用法は約7割を占めている。一方、タメニ節全例における「ないために」の割合を示したのが次の[表8]である。

[表8] タメニ節に占める「ないために」の割合

	ないために	ために	割合
目的	258	8,917	2.89%
理由	154	1,354	11.37%

[表8]から、理由用法の「ないために」は11.37%と理由用法のタメニ節の用例の1割強を占めているが、目的用法の場合は2.89%に過ぎず、目的を表すタメニ節の先行述語として「ない」はそれほど多いとは言えない。

さらに、BCCWJ 2008を構成する4種の媒体別に、「ないために」(および比較のためのタメニ節)の100万字あたりの出現頻度を見てみると、[表9]のようになる⁷⁾。

[表9] 各媒体における目的用法の「ないために」「ために」の頻度

媒体	文字数	頻度(100万字あたり)	
		ないために	ために
書籍	24,560,496	5.82	174.96
白書	8,696,195	1.03	238.84
Yahoo! 知恵袋	10,123,937	6.03	81.98
国会会議録	9,070,712	4.96	188.85
計:	52,451,340	4.92	170.01

単純に計算すると、「ないために」は、白書では100万字に1回程度、それ以外の媒体では5~6回程度見られることになる。平均すると約20万字に1回という頻度をどのように解釈するかは検討の余地があるが、確かに頻繁に目にする表現でもなさそうである。

ここで各媒体の特徴を見ておくと、対照的なのが白書とYahoo! 知恵袋である。白書は、目的用法のタメニ節の頻度が最も高い一方で「ないために」の頻度が最も低い(タメニ節に占める「ないために」の割合0.43%)。これに対してYahoo! 知恵袋は、タメニ節自体の頻度が最も低く、「ないために」の頻度が最も高い(同7.35%)。

先に第6節で扱った動作主の不一致の例が白書には見られず、Yahoo! 知恵袋に異主体かつ先行述語が自動詞の例([表7]参照)が目立つことから考えても、書きことば媒体の中で両者は文法現象の「ゆれ」の含み方が大きく異なると推測できる⁸⁾。

8. おわりに

本稿では、BCCWJ 2008における目的を表す「ないために」の実態を見ながら、先行研究の記述を検証して

きた。先行研究の指摘や一般化は、タメニ節あるいは「ないために」の典型例を説明するための規則としては概ね適切であると考えられる。

ただし、BCCWJ 2008における「ないために」の実態は、やはり、現象が典型的な例から非典型的（周縁的）な例へと連続していることを示すものであった。ここで示した(5)の記述は、可能なかぎり非典型的な例も取り込むことを意図したものである。なお、本稿では「ないために」の通時的な側面やヨウニ節との比較については扱うことができなかった。今後の課題としたい。

付記

本稿は、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築：21世紀の日本語研究の基盤整備」（「日本語コーパス」）平成20年度公開ワークショップサテライトセッション（2009年3月14日、於：東京工業大学大岡山キャンパス）における同タイトルの発表内容に、加筆・修正を行ったものである。

注

- 1) 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)の全体像については、前川・山崎(2009)を参照。BCCWJ 2008はその一部が試験公開されたもので、2,800万語分の規模(同)を持つ。今回使用したデータは、「書籍」(サンプル数4,669)、「白書」(同1,500)、「Yahoo! 知恵袋」(同45,725)、「国会会議録」(同159)から構成されている。
- 2) ただし、泉原(2007)では一定の条件の下で許容可能な表現とされており、詳しい記述がなされている。また、市川(1997)には現象の指摘のみ、大阪YWCA専門学校(2008)には例文のみが見られる。
- 3) 用例の検索には、BCCWJに同梱されている「全文検索システム『ひまわり』BCCWJパッケージ」の「plain text版」を使用した。
- 4) ただし、タメニ節はもともと目的・理由の両用法のうち目的用法に偏っていることが、タメ節との比較において指摘されている(例えば、黄2000, 池上2004, 杉本2008)。この偏りのあり方は資料のジャンル等により異なるようであるが、BCCWJ 2008全体におけるタメニ節の両用法の用例数については、[表8]を参照。
- 5) 目的を表す「可能形・可能動詞+ために」という表現は、石川(1988)では非文法的とされており、佐治(1984)、田中(2002)、稲垣(2009)のアンケート結果からも、許容する話者は少ないことが読み取れる。
- 6) 奥津(1986:82-83)は、「ない」を含む例ではないが、二つの動作主が「きわめて近い関係」にある「主語不一致」のタメニ節を分析している。
- 7) 表中の文字数は、各媒体のテキストのファイルサイズから単純計算したものであり、正確な数値ではない。さらに、Yahoo! 知恵袋については、本文以外の部分(付与されている質問・回答番号や投稿日などのデータ)を削除したうえで計算を行っている。
- 8) 各媒体のうち、助詞の後接がない例の中で動作主の不一致の例の割合が最も高いのは、国会会議録である。これは、一文が長く文法的破格が多くなりがちであるという、この媒体の話しことば的性格が影響しているものと考えられる。

例文出典

出典としてサンプルIDを付した例は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」モニター公開データ(2008年度版)による。

参考文献

- 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- 池上素子(2004)「「ため」と「ために」——農学系論文コーパスの分析から——」『北海道大学留学生センター紀要』8, pp.14-27, 北海道大学留学生センター。

- 石川 守 (1988)「目的の「ために」と「ように」、及び既定条件の「たら」、と「て」における自己の意志の問題」『語学研究』54, pp.11-30, 拓殖大学語学研究所.
- 泉原省二 (2007)『日本語類義表現使い分け辞典』研究社.
- 市川保子 (1997)『日本語誤用例文小辞典』凡人社.
- 稲垣俊史 (2009)「中国語を母語とする上級日本語学習者による目的を表す「ために」と「ように」の習得」『日本語教育』142, pp.91-101, 日本語教育学会.
- 大阪 YWCA 専門学校/岡本牧子・氏原庸子 (2008)『くらべてわかる日本語表現文型辞典』Jリサーチ出版.
- 大塚喜代子 (1964)「「のに」と「ために」——「ので」と「ために」——」『口語文法講座3 ゆれている文法』(森岡健二ほか(編)), pp.284-294, 明治書院.
- 奥津敬一郎 (1986)「(第1章)形式副詞」『いわゆる日本語助詞の研究』(奥津敬一郎・沼田善子・杉本武), pp.29-104, 凡人社.
- 國廣哲彌 (1982)「タメニ・ヨウニ」『ことばの意味3』(國廣哲彌ほか), 平凡社. (柴田武ほか (2003)『ことばの意味3 (平凡社ライブラリー)』, pp.111-118 に再録)
- グループ・ジャマシイ (1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.
- 黄 意雯 (2000)「現代日本語における「～タメ(ニ)」形式の意味・用法と使用実態」『国語学会平成12年度春季大会要旨集』, pp.158-165, 国語学会.
- 佐治圭三 (1984)「類義表現分析の一方——目的を表す言い方を例として——」『金田一春彦博士古稀記念論文集第二卷言語学編』, pp.314-294, 三省堂.
- 塩入すみ (1995)「スルタメニとスルタメニハ——目的を表す従属節の主題化形式と非主題化形式——」『日本語類義表現の文法(下)』(宮島達夫・仁田義雄(編)), pp.460-467, くろしお出版.
- 杉本 武 (2008)「複合辞「ため」「ために」の語形と用法」『コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発Ⅱ』(特定領域研究「日本語コーパス」平成19年度研究成果報告書), pp.162-179, 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班.
- 田中 寛 (2002)「目的節「ために」,「ように」の意味分析——主体と意志のありかたをめぐって——」『別科論集』4, pp.31-66, 大東文化大学別科日本語研修課程.
- 田野村忠温 (2004)「周辺性・例外性と言語資料の性格——その相関の考察——」『日本語文法』4(2), pp.24-37, 日本語文法学会.
- 仁田義雄 (1988)「意志動詞と無意志動詞」『言語』17(5), pp.34-37, 大修館書店.
- 仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
- 仁田義雄 (1995)「文法における規則性と例外的現象」『日本語学』14(4), pp.42-51, 明治書院.
- 仁田義雄 (2004)「意志性から見た主語」『言語』33(2), pp.41-49, 大修館書店.
- 日本語記述文法研究会(編) (2008)『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版.
- 前川喜久雄・山崎 誠 (2009)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』」『国文学解釈と鑑賞』74(1), pp.15-25, 至文堂.
- 前田直子 (1995)「スルタメ(ニ), スルヨウ(ニ), シニ, スルノニ——目的を表す表現——」『日本語類義表現の文法(下)』, pp.451-459, くろしお出版.
- 前田直子 (2006)『「ように」の意味・用法』笠間書院.
- 升岡香代子・鹿野千晴 (2000)「目的を表す「ために」「ように」の使い分け」『日本語教育研究』39, pp.14-28, 言語文化研究所.
- ウェスリー・W・ヤコブセン (2004)「日本語における目的表現に関する一考察——「ために」「ように」「のに」を中心に——」『言語と教育——日本語を対象として——』(小山悟ほか(編)), pp.101-119, くろしお出版.

On the Use of *nai-tameni* as a Purpose Clause

MOGI Toshinobu

This paper describes the use of the expression *nai-tameni* in Japanese, by using the “Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ)” (the monitor version in 2008).

The *tameni* clause in Japanese has a “purpose” interpretation, which is determined by the controllability of the predicate that precedes *tameni*. In this sense, *nai-tameni* is a non-canonical expression, because the negative *nai* is a sort of stative predicate, and not a controllable one.

This paper shows the variations of the *nai-tameni* construction in the BCCWJ, and analyzes this phenomenon from the following four viewpoints: (1) the frequency in the BCCWJ; (2) the occurrence of the following particles; (3) the properties of the preceding verbs of *nai-tameni*; and (4) the mismatch of the agents of the main and subordinate clauses.